



染付三段重ね透彫紋入香炉(大正時代)

心を揺さぶる
先人たちの
技術と情熱



染付唐子文蓋付茶碗(江戸時代後期)



染付竜刻唐獅子牡丹花瓶(江戸時代末期)

三川内

まず訪れたのは江戸、明治、大正、昭和の各時代の名品が展示されている三川内焼美術館。ガラスケースの中に整然と並ぶ細工の置物や花器はどれも芸術品のような佇まいで、「繊細優美」と称される三川内焼の原点を見るようだ。

案内をしてくださった中里勉さんは三川内焼の魅力は「精度の高さ」にあると言った。「三川内では御窯の時代から献上品の中でも主に工芸品や茶道具を作ってきました。原料である天草陶石は傷が出やすく、細工物を作るためには高い技術が必要です。当時の職人たちは天草陶石の性質を見抜いていたのだと思います。複雑な造形の細工物は、現代の専門家が見ても『一体どうやって作ったのか分からない』と言うほど素晴らしい、世界的にも高い評価を得ています。」

三川内焼の技法は染付、唐子、薄づくり、透かし彫り...といくつも挙げられるが、自身も絵付け職人である中里さんは、先人たちの思いをこう話す。「絵付けのポイントは『筆づかい』にあります。絵は線で表現します。すべての線が生き生きと描けて初めて、絵全体が生き生きとして見えるのです。先人たちの作品を見ると、悔しいくらいに筆の動きがいい、今の技術では追いつけないほど卓越していますね。」

現在、三川内には約三十の窯元がある。御用窯の時代は絵付けや透かし彫りなどの技術は専門職であつたが、明治になり民窯となつてからは、これらの技術は各窯元にその特徴が受け継がれていった。美術館内の三川内焼伝統産業会館では、それら窯元の作品が並んでおり、各々の技と個性が光る。

三川内焼は高価だ。若い人が手に取るには少々勇気がいる価格帯だと思われるが、中里さんはこう言って微笑んだ。「日本の食卓には磁器、陶器、ガラス、漆器...と様々な工芸が並びます。これは日本独自の生活スタイルです。私は若い方にはぜひ日本の工芸全体に興味を持つような生活をしてほしいと願っています。いろいろな器に興味を持つことで、いずれは三川内焼に触れる時が来てくれるのではと考えているからです。」

三川内焼美術館／

三川内焼伝統産業会館

三川内陶磁器工業協同組合の理事を務める中里勉さん。「近年は若い後継者も生まれ、産地が活気づいてきました」と話す。

